

伊豆沼・内沼

(いずぬま・うちぬま)

位置：北緯38度43分、東経141度06分／標高：6m／面積：559ha／湿地のタイプ：淡水湖／保護の制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区／所在地：宮城県栗原市、登米市／登録：1985年9月／国際登録基準：2、3／EAAFPネットワーク参加地

湿地のタイプ：淡水湖



早朝、ねぐらにしていた沼から飛び立つマガン



伊豆沼(左)と内沼



バス・バスターズの様子

湿地の概要：

伊豆沼・内沼は、宮城県の北西部、北上川の支流の迫川(はさまがわ)の沖積平野にある大小2つの淡水の沼。大きいほうは伊豆沼で、小さい内沼とは1本の水路でつながっている。周囲は一面の水田で、南・西・北の三方を標高30～50mの丘陵で囲まれている。

かつて一帯は北上川と迫川がぶつかる氾濫原で、広大な低湿地帯だった。1930年ごろからの干拓事業で湿地や沼の多くは水田に開拓され、東北地方有数の穀倉地帯となった。伊豆沼・内沼も一部が埋め立てられ、昔の2分の1ほどの面積の灌漑用水池、洪水を調節する遊水池として残されたのが、今の姿である。水深は平均1mほどだが、伊豆沼の東側にある水門によって洪水時の水位調整と農業用水管理が行われている。

渡り鳥の越冬地：

この地域は積雪が少なく、厳冬期でも湖面が凍結しないため、冬になると多く

の渡り鳥がおとずれる。周辺に採餌場となる広大な水田があるため、10万羽以上のマガン、オオハクチョウ、ヒシクイなどがここを利用する、国内最大級の越冬地である。南側にある同じ条約湿地の蕪栗沼(かぶくりぬま)とは、越冬地として相互補完関係にある。

豊かな生物相：

伊豆沼・内沼は、水深が一番深いところでも1.6mと浅く、ヨシ、マコモ、オギ、ハス、ヒシ、ガガブタ、アサザなどの水生植物が豊富で、周囲を含めて約700種の植物が確認されている。夏には湖面をハスの花が覆い、毎年「はすまつり」がおこなわれ、人々は遊覧船で観賞する。魚類はコイやフナを中心に40種。絶滅危惧種であるゼニタナゴやミナミメダカ、ジュズカケハゼなども生息する。トンボはウチワヤンマ、オオセシジトトンボ、チョウトンボ、コフキトンボなど35種が確認されている。

バス・バスターズ：

1996年ごろから特定外来生物であるオ

クチバスが増え、ゼニタナゴ(絶滅危惧種 I A類)などの在来魚が捕食され、著しく減少した。2004年には地元の公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団が中心となり、ボランティアによるバス・バスターズが結成され、駆除活動が始まり、NGOや市民、企業、高校生など多くの方が参加している。その他、環境省や宮城県等によるオクチバスの防除事業も行われており、在来魚の回復傾向が見られ、ゼニタナゴの稚魚も確認できるまでに復活してきている。

●関係機関

宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
Tel: 0228-33-2216
淡水魚館(登米市)
Tel: 0220-28-3111
昆虫館(栗原市)
Tel: 0228-22-7151

